The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	民族紛争における文化財破壊 : ボスニア・ヘルツェゴビナの事例から
Author(s)	原本, 知実
Citation	国際公共政策研究. 2009, 13(2), p. 127-140
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

民族紛争における文化財破壊
── ボスニア・ヘルツェゴビナの事例から

The Destruction of Cultural Properties during Ethnic Conflicts
── The Cases of Bosnia and Herzegovina ──

原本知実*

Tomomi HARAMOTO*

Abstract

The violent destruction of cultural properties is a grave concern during ethnic conflicts. Especially after the mass deliberate destruction in Bosnia and Herzegovina during the 1992-1995 conflict, the protection of cultural property became a subject of considerable discussion in international society. Considering the effective measure to protect cultural property from intentional attacks, it is necessary to analyze the determinants of the destruction through lens of the destroyers. I analyze the political factors of deliberate destruction of cultural properties during ethnic conflict from the incidents in Bosnia and Herzegovina. This paper shows that the substance of destruction is not just the property itself but the history related to it.

キーワード：民族紛争、ボスニア・ヘルツェゴビナ、文化財、意図的破壊

Keywords：ethnic conflict, Bosnia and Herzegovina, cultural property, Deliberate destruction

* 大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程

はじめに

ボスニア・ヘルツェゴビナ[1] 紛争（1992 ～ 1995）における文化財破壊の大部分は、戦闘地域内で偶発的に起きたのではなく、計画性を持って意図的に実行されたとみられている。そのため、この破壊者は旧ユーゴ国際刑事裁判所（International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia 以下ICTYという）において、民族・人種・宗教的な集団の全部または一部を抹殺する行為を行ったとしてジェノサイド罪として裁きを受けた。これまでも武力紛争の中で数多くの文化財が破壊されてきたが、近年の民族紛争下で文化財が攻撃対象とされる傾向はさらに強まっている。そして中でも、特に悲惨な破壊を経験したのがボスニアであった。モスタルの橋が破壊される映像が、世界中の人々に衝撃を与えたことは記憶に新しい。

では、文化財はなぜ民族紛争の中で破壊されるのであろうか。民族紛争下での文化財破壊は、略奪や戦闘下での偶発的破壊とは異なり、極めて政治的な要因によって繰り広げられる。文化財には客観的に価値を認められたものと、主観的に価値を認められたものの２種類あり、前者のなかから特に価値の高いものが法定文化財として認められている。しかし、ボスニアなど民族紛争下で破壊される文化財の多くは法定文化財ではなく、したがって破壊者が破壊するのはある特定の民族や宗教に属する人々にとって主観的に価値を持つ文化財であった。これはつまり、文化財の持つ物質的な価値以上に、精神的な価値が破壊の対象となっていると考えられる。したがって、民族紛争下での文化財破壊を理解するには、こうした文化財の精神的価値を明らかにし、それがどういった政治的な要因によって破壊されたのかを知る必要があるといえる。現在も続く民族紛争下で新たな文化財破壊を食い止めるためにも、またすでに起こった破壊の悲惨な歴史を乗り越えて平和を築くためにも、こうした関係を理解することは重要であるといえる。

本稿の目的は、民族紛争下で文化財の意図的破壊が行われる政治的要因を分析することにある。そのために事例として、近年の民族紛争で最も大規模な文化財破壊が行われたボスニアのケースを取り上げている。論文の構成は、まずボスニアでの文化財的をめぐる背景を概観し、次に実際の破壊の状況を分析した後で、破壊状況から見えるボスニアでの意図的破壊の特徴を示していく。ここで示された特徴の中から、この紛争で文化財破壊が持っていた政治的要因を分析していくこととする。また最終的には、意図的に破壊されえた文化財が、紛争後の修復・再建の際に抱える困難についても議論していくことにする。

これまで文化財保護の研究の中では、文化財の技術的な保護に関する議論が中心であり、破壊行為の分析に視点に重点をものはあまり見られなかった。しかし、実際に破壊が始まった後では、技術的な対応には限界がある。破壊行為を分析することは、将来的に起こる文化財破壊を予測して、事前に破壊行為に備えることにつながっていく。各地で起こる民族紛争におけるこれ以上の文化財破壊を食い止めるためには、ボスニアでの文化財の破壊要因を分析し、そこから教訓に学んでいく

1）以後はボスニアと略記する。

ことが必要である。

本稿では「文化財」として、歴史的・文化的に価値を持つ建造物に焦点をあてて論じることにする。具体的にはモスクや教会等の信仰の場や墓[2]、図書館、博物館、橋[3] などである。また、これは「法定文化財」に限定しない。

1. ボスニアにおける文化財の歴史的背景

1991年の紛争直前の段階で、ボスニアの民族構成は、モスリム人44%、セルビア人31%、クロアチア人17%であった。3者の違いは客観的事実によるものではなく、歴史の中で作られた自己認識の違いであり、現在は宗教や文字（言語）の違いとして表れている。この場所で起きた悲劇は「民族浄化」とも呼ばれ、バルカンの長い歴史で生まれた長期にわたる民族の怨念によって必然的に起こったといわれることもあるが、実際には当時の指導者が仕掛けた政治的な闘争によって引き起こされた面が強い。こうした自己認識による民族の違いが目に見える形で表現されるものの一つは文化財であり、このことが紛争下での意図的破壊という運命をもたらしていった。

ボスニアの文化的特徴を理解するためにも、また今回の文化財破壊の根底を理解するためにも、歴史的・地理的背景を理解することが不可欠となる。そのためここでは文化的特徴を生み出した背景について説明していく。

古くからこの地域は「文化の十字路」と呼ばれ、東西の交わる要所として知られていた。さまざまな民族がこの場所を通過し、また定住することで現在のような複雑な民族構成が生まれた。同時に、バルカン地域は山脈に囲まれる地理的要素もあり、多様な文化圏が形成されていった。これら文化圏は必ずしも民族の境界とも現在の国境とも一致せず、ここにバルカン地域の複雑性がある[4]。

地理的に東ローマ帝国と西ローマ帝国の境界線として位置していたため、中世には西方カトリック教文化圏、ビザンチン・東方正教文化圏の交わる地点となり、ボスニアにはこれら二つのキリスト教会のほかに、ボスニア教会の3つのキリスト教会が共存する様子が見られた[5]。

オスマントルコ時代にはイスラム教への改宗者も数多くみられるようになった。この時代ムスリムと非ムスリムの間には行政上の区別はあったが、柴[6] によると当時の人々の間では、地域を基盤にして作られたボスニア人意識が一般的であったという。オスマントルコ時代に西欧諸国では近代

2）魂は肉体に宿るもので、死して後も最後の審判まで、人は遺体の形をとって墓に安置された状態で待ち続けるという思想をもつイスラム教徒にとって、墓は非常に重要な存在である。深見奈緒子『世界のイスラーム建築』講談社、2005年、30－31頁。
3）ボスニアではオスマントルコ時代に優れた技術によって建設された芸術的な橋が見られる。
4）柴宣弘『図説　バルカンの歴史』河出書房新社、2006年改訂版、13ページ。
5）International Court of Justice, Year 2006, Public sitting held on Friday 17 March 2006, at 10am., at the Peace Palace, President Higgins Presiding, in the case concerning the Application of the Convention on the Prevention on the Prevention and Punishment of the Crimes of Genocide（Bosnia and Herzegovina v. Serbia and Montenegro), The Hague, p.15.
6）柴宣弘『ユーゴスラビア現代史』岩波書店、1996年、23ページ。

の「国民国家」の概念が芽生え、次々と国家が形成されていった。しかしオスマントルコの支配が続いたボスニアでは、この時期においても諸民族のあいだでの国民国家の意識は希薄であった。しかしこの意識は1880年代ハプスブルク帝国の時代に、正教徒やカトリック教徒の宗教共同体に対して、セルビア公国やハプスブルク帝国内のクロアチアからの民族的な働きかけが行われたことで、正教徒はセルビア人、カトリック教徒はクロアチア人として民族意識が浸透したことによって変化する。こうしてムスリムも宗教を基盤として民族意識に目覚めていくこととなり、それぞれの民族意識が高まっていった。以降､ハプスブルク帝国における「ボスニア人」や旧ユーゴにおける「ユーゴスラビア人」などの形成が試みられたが、逆にこうした政策によって民族意識はさらに強まる結果となった[7)]。

文化の面ではオスマントルコ時代とオーストリア・ハンガリー帝国の時代に華々しい時代を迎え、特にオスマントルコ時代にはムスリム、カトリック、正教徒、ユダヤ人が共存し、それぞれの文化的特色を反映した建造物を建設されていった。現在でも残る建築文化財の多くはこの時代に建設されたものであり、サラエボ旧市街にあるモスクや教会、シナゴーグなどもこの時代に建てられた。異なった宗教の建築物を同じ地域に建設するということは、この地域には融和と共存の精神が存在した証しである[8)]。また、この時代の橋の建設技術には卓越したものがあり、1993年に破壊されたモスタルの橋もこの時代に建設された。

ボスニアでは現在も、オスマントルコ時代の建造物とオーストリア・ハンガリー帝国時代の建造物が共存し、東西の混ざり合う異国情緒あふれる空間を作り上げている。

こうした歴史的背景の中で、ボスニアの文化には二つの特徴がみられるようになった。まず、文化の交差点として数種類の文化が混ざり合うことで非常に特徴的な文化が誕生していったこと、また一方で混ざり合うだけでなく、異なった文化を持つ人々が共存するための寛容の文化が生まれたことである[9)]。結果的にこれらの特徴は民族紛争の中で否定され、そのことが紛争下での大規模な破壊につながっていったと考えられる。

2. 文化財破壊の状況[10)]

（１）概要

ボスニアの文化財が破壊の危機に立たされたのは、1990年代の紛争が最初の経験ではない。第二次世界大戦中、ナチスやクロアチアがユダヤ人やセルビア人の文化財を破壊することに躍起になった歴史がある。また、第二次世界大戦期からスターリンの時代にかけて、宗教の弾圧とともに文化

7）同書、25－26ページ。
8）International Court of Justice, op.cit., p.16.
9）*Ibid*.,p.14.
10）紛争直後の混乱の中では文化財に関する調査は優先順位が高くなく、そのため現在でもボスニア・ヘルツェゴビナにおける文化財破壊の最終的な正確な数は発表されていない。そのため本稿では、不完全ではあるがいくつかの団体によって別々に調査された数字を用いている。

財は多くの被害を受けた。カトリック教会のなかには活動を停止させられたものもあり、またいくつかは破壊の被害を受けた[11]。しかし、ボスニア紛争の間には、こうした破壊とは比較にならないほどの規模で破壊は繰り広げられた。

ボスニアでは旧ユーゴスラビア時代からInstitute for the Protection of the Cultural, Natural and Historical Heritage of Bosnia and Herzegovinaがボスニア全体の文化財を担当する機関として、調査や管理を行っていた。しかし紛争後は旧ユーゴスラビアの消滅とともにその権限と運営資金を失い、そのためボスニア全土の文化財破壊に関する完全な調査は行われなかった。一方で文化財保護のためにデイトン合意で設立以降に設立が決められたBosnia and Herzegovina Commission to Preserve National Monumentsがその後の文化財関連の業務を担当することになるが、これが機能し始めるのはデイトン合意後５年以上経過してからであった。そのためボスニアでは文化財の破壊状況に関する総合的な公式データはなく、本稿でも個別になされた調査の信頼できる資料を利用している[12]。

1995年12月の調査[13] によると、ボスニアの文化財のうち2771の建築文化財が破壊または損壊の被害を受けていた。このうちの713は完全に破壊されており、554は焼失または使用不可能な状態であった。また、破壊された文化財のうちの60パーセント近くが、オスマントルコ時代（1440－1878）またはオーストリア・ハンガリー帝国時代（1878－1918）のものであったという。

旧ユーゴスラビア時代の1987年に、ボスニアでは文化財の評価と登録をおこなった。ここで8800件の不可動文化財の存在が報告され、このうち2267件が保護対象文化財となり、欧州評議会による文化財の評価基準をもとに４段階に分けて登録された[14]。

紛争後の1995年11月に行われた調査では、こうした不可動文化財のうち2771件が破壊または損壊していることがわかり、うち713件は完全に破壊され、554件は焼失または使用不可能な状態にあることがわかった。つまり国内のほとんどの不可動文化財が被害を受けたことになる[15]。

登録されていた文化財の中でも、58件登録されていた最も価値の高いモスクやテッケ（イスラム神秘主義教団の修行場）のうち､第一種に登録されていた13件を含む22件が完全に破壊されており、ほかのすべての物件も破損していた。また、教会（カトリック、正教）に関しても、15世紀から19世紀に建設された、最も価値ある40件のうち５件が破壊され、４件が破損の被害を受けていた。サラエボにある２つのシナゴーグも一部破壊の被害を受け、ほかには墓地なども破壊などの被害を受けた。オーストリア＝ハンガリー帝国時代の建造物は16件が第一種として登録されていたが、これらも損壊の被害を受け、そのうちの４つは完全に破壊されていた。国立図書館もこの第一種に登録

11）Robert Bevan, *The Destruction of Memory: Architecture at War*, London, Reaktion Books, 2006, pp.33f.
12）International Court of Justice, op.cit., pp.46.f.
13）Bosnia and Herzegovina Commission to Preserve National Monuments, *Cultural Memory : A Vanishing Treasure*, Sarajevo, July 2004, p.31.
14）*loc, cit.*
15）*loc, cit.*

されていた[16]。

（２）宗教関係の文化財

Institute for the Protection of the Cultural, Natural and Historical Heritage of Bosnia and Herzegovinaによって行われた調査[17] によると、この調査の時点では1454件の文化財が破壊または破損の被害を受けており、この内イスラム教関連は1284件（1024件が宗教的なもので260がその他の用途）、カトリック関連は237件（182件が宗教的なもので55がほかの用途）、正教関連は30件（28件が宗教的なもので２件がその他の用途）であったとされている。

特に被害が大きかったのがイスラム教関連の文化財であった。ボスニアでのイスラム教の建築文化財には、モスク、テッケ、トゥルベ（ドームで覆われた墓廟）、時計塔、マドラサ（イスラム神学校）、メクテブ（学校）、イスラム教関連の図書館や資料館などがある。

2002年７月にRiedlmayer氏によって行われた現地調査[18] によると、19の自治体で調査した277件のモスクのうち、22件（８％以下）は軽度の被害[19]、残りの225件は深刻な被害を受けており、136件は完全に破壊されていた。深刻な被害を受けた255件のうち161件（60%）はオスマントルコ時代またはオーストリア・ハンガリー帝国時代に建てられたものであった。なかでも71件は文化財として登録されていたにもかかわらず、ボスニア人地域にあった５件を除いては深刻な被害を受けていた。他にも17件のトゥルベを調査した結果、11件の文化財として登録されていたものも含めてすべてが深刻な破損または完全に破壊されていた。テッケに関しては４つのうち３つは深刻な破損または破壊された状態で、深刻な被害を免れた１つはサラエボにあるものであった。

同調査ではカトリックキリスト教の被害状況も報告されており、その被害は教会、修道院、カトリック宗教図書館と資料館であったという。この調査では57件の教会のうち14件（24%）は軽度の破損であったが、軽度の破損で済んだものは、サラエボにあったものやセルビア人勢力地域ではなかった。しかし、カトリック教会に関しては、セルビア人勢力下にあっても軽度の被害で済んだものもある。この調査では７件の登録文化財があり、１件を除いてはすべて深刻な破壊または完全に破壊されていたことが明らかになった。

（３）図書館・資料館など

ボスニア紛争時には図書館や資料館も破壊の被害を受けている。特にサラエボにあった国立図書

16）*Ibid*., pp.30f.
17）この調査は不完全なものではあるが、この時期の唯一のボスニア全体の文化財を管理していた機関のデータであるため本稿で利用する。Mehmed Bublin,Gradovi Bosne I Herzegovine: Milenij Razvoja I Godine Urbicida（The cities of Bosnia and Herzegovina: A Millennium of Development And the Years of Urbicide, Sarajevo: Sarajevo Publishing, 2005, p247
18）András J, Riedlmayer, Destruction of Cultural Heritage in Bosnia-Herzegovina, 1992-1996: A Post-War Survey of Selected Municipalities, 2002, Expert Report commissioned by the International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia, pp.9f.
19）同調査のなかでは、この22件は、ボスニア人地域のなかの前線に近い場所にあったため弾丸によって軽度の被害を受けた、セルビア人地域であったが建設中であった、のどちらかであったと報告されている。

館とオリエンタルインスティチュートが受けた被害は甚大であった。他にも、モスタルにあるカトリック教会の資料館なども、破壊によって壊滅的な被害を受けた、

オリエンタルインスティチュートは、バルカン半島で最も充実したオスマン時代の資料を保管していた。200,000もの貴重な歴史的資料がおさめられ、この中には本や写本、またオスマン時代の戸籍などといった、500年に及ぶ歴史の証拠があった。しかし、1992年５月17日に攻撃にされ、99%の収蔵品は灰と化した[20]。紛争直前にこれら収蔵品を避難させるための計画はあったが、この場所が予想以上に早い段階で攻撃されてしまったため、貴重な資料を守ることができなかった[21]。

国立博物館は1986年に、当初は市役所として利用するために建てられた。オリエンタルなスタイルの中にスペインのアルハンブラの特徴を取り入れた建築は、ボスニアのシンボル的な建造物となり、のちに国立図書館として利用されるようになる。国立図書館となってからは、850,000冊の本と220,000冊のユーゴスラビア内外の雑誌、114,700冊のボスニアの雑誌、170,000の特別コレクションと、3,500の科学関連の書物が収められ、ボスニア研究の情報の中心的役割を果たしていた[22]。紛争開始後ほどない1992年８月25日、この図書館を狙った攻撃が開始された。ここは周囲を山に囲まれた地形であったため、四方から40回以上の砲撃をうけることで、ボスニアの長い歴史は炎に包まれていった。火災は３日近く続き、90％以上の貴重な文献は焼失された[23]。

証言によると図書館への攻撃は、爆発物によって建造物を破壊したのではなく、建物の外壁にも銃弾による攻撃の跡はあるが、多くが火災をもたらすための兵器によって行われたということである。この兵器がもたらす火は消火が困難なレベルの高温であり、したがって被害の大部分は内部の火災によるものであった[24]。図書館には地元住民の思い入れも強く、周辺の一般市民でさえも蔵書を救うために協力しようとした。しかしこの攻撃の直前からサラエボ市内は断水しており、消火活動を行うことは不可能であり、ただ火が消えるまで眺めているしかできなかった[25]。消防隊の活動も、武装したボスニアのセルビア軍によって阻止されている[26]。

3. 破壊の状況から見る意図的破壊の特徴

紛争や戦争という状況の中で、文化財の破壊が意図的であるか、偶然に起こったのかを見分ける

20）International Court of Justice, *op.cit.*, p.34.
21）筆者が行った聞き取り調査による。（2008年３月14日Institute for the Protection of the Cultural-Historical and Natural Heritage of Canton SarajevoにてDamir Hadžić氏）
22）AndrasJ. Riedlmayer, “From the Ashes: The past and Future of Bosnia’s Cultural Heritage”, *Isram and Bosnia: Conflict Resolution and Foreign Policy in Multi Ethnic States*, Ed. Maya Shatzmiller, Montorial: McGill-Queens University Press, 2002, p105.
23）AndrasJ. Riedlmayer, Erasing the Past: The Destruction of Libraries and Archives in Bosnia- Herzegovina.” Middle East Studies Association Bulletin vol.29 no.1（July 1995）, p.105.
24）Riedlmayer, “From the Ashes: The past and Future of Bosnia’s Cultural Heritage”, p104
25）筆者が行った聞き取り調査による。（2008年３月16日サラエボ国立図書館周辺住民）
26）Riedlmayer, *loc,cit.*

のは非常に困難であるといえる。特に、国家間の戦争の場合に行われる大規模な攻撃の場合には、一つ一つの文化財が意図的に破壊されたのか、戦闘によって偶発的に破壊されたのかの区別はつけにくい。しかし、ボスニアでの破壊に関しては、破壊の状況や手法から見て意図的に破壊されたと考えることができ、これによって破壊はICTYで裁かれるに至った。ここではICTYで用いられた資料などをもとに、どういった点に意図的破壊であると見ることができるのかを中心に、破壊の特徴を見ていくことにする。

まずボスニアの紛争前の民族構成であるモスリム人：セルビア人：クロアチア人は44：31：17に対して、破壊された文化財は、イスラム教：正教：カトリックは428：10：79であった[27]。明らかにイスラム教関連の文化財の破壊が多く、不自然な破壊の数的偏りが見られ、これは戦闘行為の中で無差別に破壊されたというよりも、意図的な破壊であったと見ることができる。加えて、イスラム教やカトリックの文化財の破壊の多くはセルビア人の勢力下で行われており、ほとんどの場合は破壊文化財の周囲で戦闘は行われていなかった。これは破壊が偶然ではないことを示しているとともに、特定の民族によって特定の民族の文化財が破壊されたことを示しているといえる。

技術的な点から分析すると、まず破壊が内部からの爆破によって行われたことが意図的破壊の証拠とされている。また､破壊された文化財の多くには銃弾で狙われたような痕跡が見られないため、銃撃戦のなかで偶然に破壊されたとは考えにくいという。サラエボの国立国会図書館などのように外部から破壊されたケースもあるが、この場合も周辺で銃撃戦はなく、外部からの攻撃も銃弾によって建造物を傷つけるというよりも内部に火災をもたらす兵器が主に使用されているため、戦闘下で巻き込まれたものとは考えにくい。また、戦闘行為によって偶発的に起こった破壊ではなかったことは、多くの破壊の被害は当該建造物に限定され、周辺の建造物は破壊されない、または周辺に建造物がなかった点から裏付けられている[28]。ボスニアでは共存の歴史があったため、モスクや教会が隣接するのは珍しい光景ではなかった。これにもかかわらず隣接するうちの一方は完全に破壊され、もう一方は無傷という不自然な状況もみられる。たとえば、1996年にICTYが行った調査では、ボサンスキ･サマック市のカトリック教会は二か月近くかけて完全に破壊された例がある。これは、向かいに正教会があり、こちらに被害が及ばないように慎重に作業が進められたことが背景にあるという[29]。

モスクの破壊に関しては、ほとんどのケースでミナレットがまず破壊されている点から、意図的であったと考えられている。ボスニアのミナレットは非常に細い塔であり、これを遠距離から狙って攻撃することは非常に困難であり、またこれが単独で戦闘に巻き込まれて破壊される可能性も非常に低いと考えられる[30]。また、モスクの破壊のほとんどは、大量の地元モスリム人が土地を離

27）Bublin, *op.cit.*, p247
28）2003年７月８日ICTYでのミロシェビッチ裁判でのRiedlmayer氏の証言
http://www.un.org/icty/transe54/030708ED.htm（accessed on November 27. 2008）
29）*Ibid.*
30）筆者が行った聞き取り調査による。（2008年３月３月14日Institute for the Protection of the cultural-Historical and Natural Heritage of Kanton Sarajevo にてDamir Hadžić氏）

れる直前か直後に行われている点で、偶発的な破壊であるとは考えにくい[31]。

図書館、資料館に言える特徴は、破壊が建造物だけでなく内部の破壊を目的として行われた点にある。特に国立図書館のように内部を焼失させているのは、破壊対象を建造物ではなく、その内部の収蔵品とみて攻撃されたものであると考えられる。

また破壊攻撃の方法のみでなく、攻撃前後の行為からも計画性を見ることができる。国立図書館の攻撃直前からの断水はその１つである。サラエボ市はこの攻撃の日断水していたため燃え上がる炎を止めることはできず、これによって貴重な資料の焼失の被害が拡大した。当時、水の供給はセルビア軍に管理されており、断水はセルビア軍によるものであった。これは図書館破壊の火災を知ったうえで、計画的に断水を行ったものであるとみられている[32]。またそれだけでなく、消火活動は武器を用いてまでも妨害されておりここに破壊の意思を見ることができる[33]。

いくつかのモスク破壊では、破壊直後にブルドーザーを用いてモスクを土台から完全に消し去り、瓦礫をすぐにトラックで運び出して処理している。この技術のほとんどは専門的であり、破壊の技術を持つものによって計画的に実行されているという[34]。こうしたことはまた、単なる物質的な破壊ではなく、その根底から破壊することに重点を置いていることを示している。

国内紛争の中での意図的破壊としての特徴的な点もみられる。まず、ボスニアは旧ユーゴスラビアの一部であり、文化財に関してもすべての情報がベオグラードに送られていた[35]。それは、セルビア人側には文化財所在地と管理状況をすべて把握するためのリストが存在し、その情報をもとに破壊が計画的に行われたことを示している。Riedlmayerによると、大規模に行われたモスクの破壊であっても、建設中のものは資材の盗難や軽度の破壊などを除いて、建設中の物件が攻撃された例は少ないという[36]。つまり、建設中の物件はリストの中になかったため、破壊の対象になっていなかったと推測されている。一方セルビア正教会が所蔵していた可動文化財に関しては、紛争直前に速やかにベオグラードに移送し、破壊を免れているとの証言もある[37]。

ボスニアの文化財の破壊は、文化に対して理解のない、ならず者によって突発的に行われたという見方もある[38]。確かにブルーシールドの標識[39]があったことによって攻撃を受けた例もあり[40]、この標識が価値を理解しない兵士に攻撃標的のサインとなったことも否定できない。しかし、

31）Bosnia-Herzegovina Cultural Heritage Report, p11
32）International Court of Justice, Year 2006, Public sitting held on Friday 17 March 2006, at 10am., at the Peace Palace, President Higgins Presiding, in the case concerning the Application of the Convention on the Prevention on the Prevention and Punishment of the Crimes of Genocide（Bosnia and Herzegovina v. Serbia and Montenegro), The Hague, p.34.
33）Bevan, *op.cit.*, p.38
34）International Court of Justice, *op.cit.*, p.31.
35）筆者が行った聞き取り調査による。(Damir Hadžić氏)
36）Riedlmayer, András J. 2002. Destruction of Cultural Heritage in Bosnia-Herzegovina, 1992-1996: A Post-War Survey of Selected Municipalities. Expert Report commissioned by the International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia, pp,9-11.
37）Bevan, *op.cit.* p.40.
38）The Institute for the Protection of Cultural-Historical Heritage Sarajevo, *Destruction &War: Damages of Cultural-Historical Heritage in Old Market Place in Sarajevo-Bascščaršija*, Sarajevo, 1994. p6.
39）1954年ハーグ条約で、武力紛争の際に攻撃を差し控えさせるために、保護される文化財に対して掲げることが定められた標識。旧ユーゴスラビアはこの条約の数少ない批准国の一つであった。
40）筆者が行った聞き取り調査による。(Damir Hadžić氏)

攻撃され破壊された文化財にはブルーシールドが掲示されていない物件も多く、そのうちの多くが必ずしも美術的な価値を認められるものではなく、ある特定の集団にのみ意味のある宗教施設などであった。加えて、モスクの破壊などは専門的な技術によって破壊されており、ならず者個人が行った破壊であるとは考えにくい、このことからも多くの破壊はならず者が個人で行ったのではなく、文化財の背景と意味を理解していたものによって計画的に行われたと考えられる。

また、戦闘に巻き込まれて破壊されてしまったのではないかとの反論もある。1992－1995年の間に破壊された文化財の中のいくつかは前線にあったため、戦闘に巻き込まれて破壊されてしまったように見えるが、実際の破壊は1992年と紛争開始直後か、中には紛争が始まる前に破壊されていたものもある。そして多くは、いずれかの勢力がその地域を圧したときに破壊されており、破壊時には戦闘下ではなかった[41]。したがって、この場所での文化財破壊は戦闘に巻き込まれたものではなく、意図して破壊されたとの考察が妥当であるといえる。

文化財の破壊は、相互に繰り返される報復行動によるものでないかとも言われる。確かにボスニアでも紛争の後半に行われた文化財の破壊に関しては、報復行動であったと考えられる。しかし多くの破壊が紛争の初期に行われたことを考慮すると、これは報復ではなく別の目的を持って計画的に破壊されていたと考えられる[42]。

以上のような破壊状況から、ボスニアでの文化財の破壊は意図的であり、また破壊された物件の種類や方法に、国内的な民族紛争であったボスニアの文化財破壊の特徴をみることができる。次にこうした特徴をもとに、破壊の要因を破壊状況から分析していくことにする。

4. ボスニアでの文化財意図的破壊の政治的要因

河野[43] は一般に文化財の持つ文化価値には、独立性と共通性という二つの側面があるとしている。ボスニアで破壊された文化財にも、モスクや教会といったいずれかの民族に属する独立性を持つ文化財、そして国立図書館や博物館、そして橋などの共通性を持つ文化財の2種類が存在していたといえる。

ボスニアの文化的背景からわかるとおり、ここでは長い間いくつもの文化が混ざり合って新しい文化を作り上げる一方で、自分たちの文化を守りながら他者と共存してきた歴史がある[44]。そのため、それぞれの民族が祖先から受け継ぎ、自分たちの歴史の表象として認識してきた文化財と、異なった民族が共存してきた歴史を表す文化財がはぐくまれた。ボスニアはこうした歴史の物質的証拠を消すことで、①他者の存在の歴史を消す②自分たちが他者と共存してきた歴史を消す、とい

41）International Court of Justice, Year 2006, Public sitting held on Friday 17 March 2006, at 10am., at the Peace Palace, President Higgins Presiding, in the case concerning the Application of the Convention on the Prevention on the Prevention and Punishment of the Crimes of Genocide（Bosnia and Herzegovina v. Serbia and Montenegro), The Hague, p.31.
42）*Ibid*., p.19.
43）河野靖『文化遺産の保存と国際協力』風響社、1995年、30ページ。
44）*Ibid*., 14.

う目的を達成しようとしていたと考えられる。

他者の存在の歴史を消すために破壊されたのは、独立性を持つ宗教施設や民族の歴史を保管する場所であったといえる。中でも特に規模の大きかったモスクや教会の破壊は、その場所と民族とのつながりを消滅させ、その土地で受け継がれていた伝統とアイデンティティを破壊させる目的があったと考えられる。それは最終的に、土地と人とのつながりを途絶えさせ、追放していくことを意味している。また単に破壊だけでなく、その場所に同じモスクを二度と再建できないように瓦礫ごと処分するという行動に、その意思が表れているといえる。現地で破壊を指示した者による「ミナレットだけでなく、モスクも破壊しろ。根底から破壊して、再建できないようにして、やつらが自分たちからここを出て、二度と戻ってこられなくするんだ。」との発言からも、こうした目的を見ることができる[45)]。

歴史の資料を消すことで他者の歴史そのものを消去しようとして破壊されたのが、オリエンタルインスティチュートであるといえる。ここには、オスマントルコ時代に形成された、ボスニア人のアイデンティティと文化の歴史が収められていた。これを攻撃し歴史を消滅させたことは、この国に存在していたボスニア人の歴史を消し、ボスニア人の存在そのものを消滅させることにつながっていく。

自分たちが他者と共存してきた歴史を消すために破壊されたのが、共通性の高い国立博物館や国立図書館、そしてモスタルの橋などである。国立博物館や国立図書館には、モスリム人、セルビア人、クロアチア人のいずれか一つの民族の歴史が保管されていたのではなく、共存するすべての民族にかかわる歴史と資料が収められていた。モスタルの橋に関しては、オスマントルコ時代に建設されて以降、クロアチア人とムスリム人の共存する融合と寛容の象徴的な建造物として愛されてきた。橋を破壊して融合と寛容を否定し、以前のような共存は不可能であることを示した。また博物館や図書館に残る歴史を破壊したのは、共存してきた歴史そのものを破壊するためであった[46)]。攻撃対象となったのが建造物ではなく、内部の所蔵品であった点からもこうした傾向を知ることができるといえる。

ボスニアでの民族紛争では他民族を抹殺するために悲惨な行為が繰り広げられたが、この中で文化財の破壊は、彼らの存在した歴史を消し、同時に自分たちとの共存の歴史をも消し、土地を自分たち民族のものにするという政治的な目的達成のために行われていったと考えられる。つまり、彼らが文化財を破壊するのはこうした文化財の精神的な価値を十分に知ったうえであり、単に物質として破壊を行うよりも集団の根底からの抹殺として非常に根が深いものであるためである。

破壊が単なる物質的な破壊ではなく精神的な価値の破壊であった以上、これらの文化財は破壊後にも意味を持ちつづける。そのため近年では、こうした文化財の修復・再建に注目が集まっている。

45）Thuck Sudetic, “Serbs’ Gains in Bosnia Create Chaotic Patchwork,” New York Times, 21 Aug. 1992.
46）AndrasJ. Riedlmayer, Erasing the Past: The Destruction of Libraries and Archives in Bosnia- Herzegovina.” Middle East Studies Association Bulletin vol.29 no.1（July 1995）, p.106.

5. 平和構築と再建

文化財がもつ歴史は破壊の時点で終わるものではない。破壊により物質的には形を失うが、精神的価値は存在し続けるため、修復・再建によって新たな形でよみがえることができる。しかしこの場合、破壊された文化財には新しく二つの歴史が添加されている。ひとつは破壊の歴史、そしてもう一つが再建・修復による新しい未来の歴史である。そのため、修復・再建は平和構築に役立つとされ、ボスニアでもデイトン合意後、各国政府やNGOによって協力がなされた[47]。モスタルの橋が国際社会からの協力を受けて、比較的早い段階に修復されたのは、この代表的な例である。

一方でこれらの文化財の修復・再建は困難を抱えることも報告されている。ボスニアは現在でも２つのエンティティに分かれており、民族間の住み分けはさらに進んでいる。現在でも民族間に問を抱える以上、政治的意図を持って破壊された文化財は再建・修復に問題を孕んでいる。したがって、ここでは民族紛争下で破壊された文化財が再建や修復のなかで抱える問題点を見ていくことにする。

橋、図書館や博物館のような、共存の歴史の証拠であるために破壊された文化財に関しては、修復・再建は比較的スムーズに進むといえる。モスタルの橋のように、共存の歴史は平和構築の中でも積極的に打ち出すことができるし、博物館等はそれを展示にして表現することができることもあり、目に見える形の平和の象徴として用いやすいと考えられる。すでに再開された国立博物館では、特定の民族の優位性や他者の排除を目指すものではなく、歴史の展示とそれを超えて共存するための展示のために努力されている。またこうした文化財はいずれの民族に属するものでもないため、中立的であるとして国際社会からの援助も得やすい傾向にある。

一方で、他者の歴史として破壊された文化財の修復・再建は多くの問題に直面している。

共存の歴史とは逆に、こうした文化財、特に宗教的な文化財の修復・再建の支援は、一部の歴史的・芸術的な価値の高い物件を除いては、ほとんどが同じ宗教に属する国や宗教団体からの支援に頼っている現状がある。基本的に宗教施設の管理はそれぞれの宗教に任されている[48] が、破壊されたモスクや教会の数は非常に多いため、修復や再建は外国からの援助に頼らざるを得ない状況にある。こうした中で宗教文化財への援助はインフラ整備等と比較して、低額でありながら援助が目に見えるため、宗教的な関係を持つ国や団体から好まれる傾向にある[49]。そのためボスニアでは、こうした国々による、競うかのような豪華な宗教文化財の再建が目についている。問題は、こうした再建の中には資金提供国や宗教団体によって、彼らの国での宗派の特色を建造物に表現しようとし、ボスニアでの地域での伝統的建築様式などを取り入れない[50]、自国の建造物をそのまま移築

47）スウェーデンのNGO　Cultural Heritage without borders（http://www.chwb.org/bih/）などがある
48）筆者が行った聞き取り調査による。（Damir Hadžić氏）
49）この問題を避けて日本は中立的な立場から援助を行うため、宗教文化財の修復ではなくインフラ面での協力を行っている。（筆者のインタビュー、2008年３月13日在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本大使館　上田晋氏）
50）Stephan Schwartz, Islamic Fundamentalism in the Balkans, Partisan Review; Summer 2000; 67, 3; Academic Research Library, at http://www.bu.edu/partisanreview/archive/2000/3/schwartz.html.（accessed on November 27. 2008）

したような援助が行われている点である。

なかでも目につくのが、ボスニアの伝統とは異なった建築様式によるモスクである。これはワッハーブ派のサウジアラビア系の団体による資金によって修復、再建されたもので、破壊される以前の、オスマントルコ時代に建築されたモスク様式を無視し、アラビア式で建設されたものである。しかし紛争で破壊されたのが、物質的な「モノ」だけではなく、そこに込められた歴史であったことを考慮すると、再建には伝統の様式を尊重される必要があるであろう。こうした配慮が地域の安定と平和のために求められている中で、それを無視した形での協力には地元住民からも反発の声もある[51)]。彼らは宗教建築物の修復や再建への援助を通じて、自分たちの宗派を伝道しようとの意図を持っているといわれており、同様の修復。再建はコソボにもみられている。ボスニアの若者の間でのこうした団体の影響もみられており[52)]、この傾向は今後の民族間の融和を妨げるのではという懸念もある。

現在でも残る民族間のわだかまりとすみ分けの状況が、モスクや教会等の建築物の再建を困難にさせているという側面もある。紛争下では数多くの人々が自分たちの土地を追われ、この場所のモスクや教会の多くが破壊された。そうして以前とは異なる民族構成が生まれた場所では、以前と同じ文化財の再建や修復には困難が伴う。現在の地域住民は避難した人々の帰還を恐れており、再建による帰還の促進を危惧しているため再建に抵抗する動きがあるなど、新たな火種を引き起こしている。実際にバニャルカでのモスクの再建を巡って、ムスリムとセルビア人の間で対立が起こっている[53)]。

しかし、こうした独立性の強い文化財であっても、修復を平和構築段階へと活用する方法はあるといえる。モスクなどのように特定の宗教の文化財であっても、その建築様式のなかには共存の歴史が刻まれていた。ボスニアでの特色は、3つの民族が共存してきたことにあった。特定の民族の歴史を持つゆえに破壊されたとはいえ、これらの建築様式にある共存の歴史はこれからの寛容と融和の精神を育むために活用できる側面を持っているのである。平和構築の段階で文化財を活用するためには、こうした独立性の中にある共通性を見出し、強調していくことが有効な手段であろうといえる。

おわりに

本稿ではボスニアでの事例から、民族紛争下での文化財の意図的破壊の政治的な要因を分析し、破壊がどのような目的をもって行われたのかを見ていった。

現在でも世界各地で起こる民族紛争の中で、文化財は人命とともに奪われ続けている。しかしこれまで、紛争という状況下で文化財の保護の優先度は人道的な活動に比べて低く、また政治的問題

51）Schwartz, *Ibid.*
52）*Ibid.*
53）Bevan, *op.cit.* p.176.

として議論されることは多くなかった。文化財の破壊は単なるモノの破壊ではなく、歴史の証拠を消し去り人々の存在をその歴史から抹殺する行為である以上、破壊の要因を追求し、その保護を前進させていく必要があるといえる。これは決して文化財を人命に優先して保護することを主張するのではない。文化財の持つ物質的な学術的価値だけでなく、その政治的な側面を持つ精神的価値をもとに今以上の議論の必要性を示しているのである。

民族紛争下で次なる破壊が起こらないように、また万が一破壊されることがあってもその被害を最小限に抑えるために、政治学的視点で事前に起こりうる破壊を予測し、いかに破壊の被害を少なくさせるかが重要であり、このためにもさらに破壊の要因を研究する必要があることを強調したい。

現在もボスニアでは民族間での政治的争いは続いている。民族紛争のなかで政治的に利用された文化財であることは、修復や再建にも大きな意味があることを示している。そしてここに、平和へと活用できる可能性を見ることができる。文化財が持つ政治性をさらに追及し、破壊の要因をより深く理解していくことで、こうした可能性を新たに探ることも重要であろう。